

ているか、朝鮮銀行の大小のエージェントで、外国為替操作でたえずソ連法を犯していると考えていた³¹。朝鮮銀行は外貨に関する自らの方針に従ってソ連極東の為替市場を自分たちに都合がよい方向に組織し、密輸で手に入れた資金を海外へ送金している、というのである³²。1930年上半期には、朝鮮銀行ウラジオストク支店は同行全体の総利益の約10%を獲得しており、31ある同行支店のうちで最も収益の高い部類に入っていた³³。

朝鮮銀行ウラジオストク支店の違法行為に関する問題は、全ソ連邦共産党政治局でも審議された。1930年8月から2ヵ月にわたり、財務人民委員部極東地方財政局の監査官は、1927年1月1日から1930年8月9日までの朝鮮銀行の業務内容を検査した。

財務人民委員部は、朝鮮銀行ウラジオストク支店が「ほぼ、ソ連の現行法をあからさまに侵害する為替操作ばかり行っており」、「現行の公式為替相場を犯してチェルヴォーネツ紙幣の投機的売買にたえず従事し」、「これらすべての操作で得た利益を財政諸機関から隠し」、「ソ連邦領内において朝鮮銀行の違法な銀行券の発行を行った」として、同支店を告訴した。ソ連財務人民委員部の決議の中で言われているように、列挙されたすべてのことが「ソ連の利益に重大な経済的損失をもたらした」とされた³⁴。

これらすべての結果、課税を免れた収入は200万ルーブルに上ると結論づけられた。検査結果に基づいて、財務人民委員部は朝鮮銀行ウラジオストク支店に営業停止を命じるとともに損害賠償を求め、さらに1930年12月13日にウラジオストク支店の閉鎖を命令した。この決定は12月19日に地元新聞『クラスノエ・ズナーミヤ〔赤旗〕』に掲載された。1931年7月15日に、同銀行ウラジオストク支店は完全に閉店した。

1920年代後半のウラジオストクにおける日本人の日常生活の特色

ソ連と日本との間で日ソ基本条約が締結された時点（1925年1月20日）

で、ウラジオストクには640人の日本人が住んでいた。当時、『浦潮日報』はもう定期的に発行されず、また日本語版だけになっていたが、その1925年3月6日号では、ウラジオストクの居留民会に言及しながら、全部で645人、181世帯が住んでいると報告している。このうち32世帯が商売を営み、21世帯が会社の従業員、銀行員、販売員であった。

日ソ基本条約締結後の時代（1925～1929年）に日本人がどのように暮らしていたかを示す証言はほとんど残っていない。フォンタンナヤ通りにある日本小学校の運営は続いており、1925年には288人の児童が学び、2人の教師が勤めていた。翌年にはさらに2人の教師が加わり、全部で日本人教師が3人、ロシア人教師が1人となった。浦潮本願寺も以前と同様に日本の同胞に気を配っていた。

故入野ウラジーミル義郎の夫人である入野禮子氏の回顧談によって、日本人の日常生活を部分的に復元することができる。冬の寒い日々に、鈴木商店支店長であった入野寅蔵（義郎の父）の家には、領事の妻の山口ナカの他、木村商店という酒屋や島田商店の妻たち、およびその他の女性たちが集まった。彼女たちは中国餃子を作り、日本の花札をして遊んだ。

日本人女性たちはロシア人からイチゴジャムの作り方を習い、それをかなりたくさん作っていた。彼女たちは日本に帰ってからも、イチゴの露地栽培が行われていた間は、この「伝統」を守っていた。ビニールハウスで栽培されたイチゴはサイズが大きいので、ジャムの製造に適していなかったのである。さらにまた彼女たちは、「ミンチカツ」の作り方も覚えた。日本人はひき肉の作り方を知らなかったのである。この「伝統」を取り入れてからは、入野家では日本に戻った後も自家製のミンチカツを作っていた。そして、もちろん、二種類の具のピロシキの作り方も伝わった。一つはニンジンの具が入ったもので、もう一つはひき肉とゆで卵のみじん切りが入ったものだ。ひき肉、ナス、トマトの炒め物も彼らに好まれた料理だった。また、ウハー〔ロシア風の魚スープ〕のようなものも作った。水に鮭の頭を入れ、皮をむいたジャガイモを加えて煮て、一晚寝かせたものである。日本人たちは故国に

帰った後も「ウラジオストク会」を結成し、長い間「ウラジオストクの生活」を続けていた。

入野家はみなが正教徒だったので、ウラジオストクでは毎週日曜日に教会に通った。教会から帰宅すると、映画を見た。この伝統もまた日本で維持された。彼らはまたしばしば郊外へピクニックにでかけた。冬期の「暖かい」思い出は、ペチカ（暖炉）である。加熱器の煉瓦の壁に背中をもたせかけると、まるで太陽の暖かさのように感じ、非常に心地よかった。

禮子さんは夫（義郎）の兄、ロマン達夫から、彼（達夫）がしばしば一人で肉屋やパン屋へ買い物に行かされていたことを聞いた。また彼は、家には鉄製の門があったと話してくれた。その門から入ると中庭のようなところへ出て、そこには小さな馬小屋があったという。毎晩銃声が聞こえてきて、非常に恐ろしかった。そのため夜になると早いうちから鉄の門を施錠していたそうだ。

達夫は日本の中学校に入学するために（ウラジオストクには小学校しかなかった）、実家のある敦賀へ送られたが、春休み、夏休み、冬休みには、敦賀港からの定期船に乗ってウラジオストクに来て、両親と一緒に過ごしていた。1927年に鈴木商店浦塩支店は閉鎖され、家族は日本へ引き揚げた。

鈴木商店はかつての日本の総合商社で、日商岩井のルーツのひとつである。1877年に神戸で発足し、1927年に倒産した（これに関連してウラジオストク支店が閉鎖された）。しかしその商業部門は子会社に引き継がれて日商株式会社となり、その後他社との合併を繰り返して、1968年には日商岩井、2005年に双日株式会社となった。現在、双日は日本国内に8拠点、海外にはキエフ、モスクワ、サンクトペテルブルクを含む91の拠点を有している。

2008年5月に、小林家の人々がウラジオストクを訪れた。まだまだ若々しい小林夫妻、娘とその夫、そして成人した孫の一人であった。彼らは自分たちの祖先、つまり祖父一家が住んでいた家を探していた。彼らはその住所がマルケロフスキー横丁（現在のクラスノズナミョンヌイ横丁）の5番だということを知っていた。そこは彼らが滞在したヒュンダイ・ホテルの裏側に位置



鈴木商店浦塩支店長、入野寅蔵とその家族



入野ウラジーミル義郎（左）。兄ロマン達夫とともに

していたので、その建物を探し出すのは難しくなかった。この家は赤レンガの建物で、20世紀初期から、日本企業の支店やその従業員を収容する宿泊施設になってきた。

彼らの祖父の名前は黒田藤次郎といい、1900年生まれだった。小樽市の商業学校を卒業後、彼は静江と結婚した。若い夫婦は1926年にウラジオストクに移り、一家の主は貿易会社に就職した。ここで2人の子どもが生まれた。彼らは事務所が置かれていたのと同じ建物に住んでいた。

次頁の黒田家の写真を見て分かるように、彼らの家の中には鉄製のベッドや「モイドドイル」と呼ばれた洗面台など、洋風の家具があった。夫は白いシャツとネクタイ、ベストという洋装で、妻は和服を着ている。ウラジオストクでの生活で家族の思い出に残ったのは、「フレイプ〔パン〕」、「ミャーサ〔肉〕」、「サモワール〔湯沸かし器〕」などの言葉であった。家の近くにスイフンスキー市場（現在 A. スハノフ公園）があったので、妻の静江はよくそこで肉や野菜、その他の食品を買っていた。

小林家に残されたその他の家族写真からは、1926年から1927年まで黒田が仕事でブラゴヴェシチェンスクにいたことがわかる。しかし1929年の世界恐慌や景気の後退、日ソ関係の悪化により、黒田が勤めていた会社の事業も行き詰まった。1931年に一家はハルビンへと去っていった。

世界恐慌（1929～1932年）と国際情勢の悪化

世界恐慌によって国際情勢は極度に緊迫し、日本も大きな打撃を受けた。国際情勢の緊張は日ソ関係にも影響を与えないわけにはいかなかった。日本軍国主義勢力は攻撃性を増し、支配層における最も敵対的なグループも力を付けて、対ソ戦の準備へと向かっていった。

駐日ソ連全権代表（大使）の A.A. トロヤノフスキーは1930年に、満鉄副総裁との会談の後、後藤新平や田中義一、およびその他の政治家たちの言明